

「ため」を含む文例 (青空文庫)

	地の文	会話文	作品名
1	「船に酔ったのだ」と思った時には、もうからだじゅうは不快な嘔感のためにはわなわなと震えていた。		或る女 (前編)
2	寒いためにそうなるのか、暑いためにそうなるのかよくわからなかった。		
3	寒気のために感覚の痺痺(まひ)しかかった膝(ひざ)の関節ははいて曲げようとすると、筋を絶(た)つほどの痛みを覚えた。		
4	岡の肩は感激のために一人(ひと)お震えた。		
5	結びっこぶのように丸まって、痛みのためにもがき苦しむその老人のあとに引きそって、水夫部屋(べや)の入り口まではたくさんの船員や船客が物珍しそうについて来たが、そこまで行くと船員ですら中にはいるのを躊躇(ちゅう)		
6	今までに覚えない惑乱(まどろ)のために、頭はぐらぐらとなつて、無意味だと自分でさえ思われるような微笑をもらす愚かさをどうする事もできなかった。		
7	痛みのために無意識に顔をしかめながら、麻薬(まやく)の恐ろしい力の下に、ただ昏々(こんこん)と奇怪な仮睡(かみ)に陥り込むように、葉子の心は無理無体な努力で時々驚いたように乱れさわぎながら、たちまち物すごい沈滞(ちんたい)の淵(ふち)深く落ちて行くのだった。		
8	けさまでは雨雲に閉じられていた空も見違えるようからつと晴れ渡って、紺青(こんじょう)の色の日の光のために奥深く輝いていた。		
9	頭の中は急に叢(むら)がり集まる考えを整理するために激しく働き出した。		
10	葉子は定子をあわれむよりも、自分の心をあわれむために涙ぐんでしまった		
11	葉子は果ては枕(まくら)に顔を伏せて、ほんとうに自分のためにさめざめと泣き続けた。		
12	ハンケチは涙のためにしぼるほどぬれて丸まっていた。		
13	木村の手を感ずると恐怖と嫌悪(けんお)とのために身をちぢめて壁にしがみついた。		
14	葉子は、泣いたために妙に脹(は)れぼったく赤くなって、てらてらと光る木村の鼻の先が急に気になり出して、悪いとは知りながらも、ともするとそこへばかり目が行った。		
15	葉子は、不用意にも女を捕えてじかつけに病気の種類を聞きただす男の心の粗雑さを忌みながら、当たらずさわらず、前からあった胃病が、船の中で食物と気候との変わったために、だんだん嵩(こう)じて来て起きられなくなったようにいい繕った。		
16	話の調子を変えらるためにしいていくらか快活を装って、		
17	しかしこんなはずらめいた事のために話はちよつと途切れてしまった。		
18	役者下手(べた)なために、せつかくの芝居(しばい)が芝居にならずにしまった事を物足らなく思った。		
19	葉子の多感な心は、自分でも知らない革命的ともいうべき衝動のためにあてもなく揺(ゆる)ぎ始めた。		
20	しばらくの間(あいだ)葉子はこの奇怪な心の動揺のために店を立ち去る事もしないでたずんでいたが、ふとどうにでもなれという捨てばちな気になって元氣を取り直しながら、いくらかの礼をしてそこを出た。		
21	さらぬだにどこかじめじめするような船室(カビン)には、きょうの雨のために蒸すような空気がこもっていて、汽船特有な西洋臭いにおいがことに強く鼻についた。		
22	……定子……葉子はもうその筈(しもと)には堪えないというように頭を振って、気を紛らすために目を開いて、とめどなく動く波の戯れを見ようとしたが、一目見るやぐらぐらと眩暈(めまい)を感じて一たまりもなくまた突つ伏(ぶ)してしまった。		
23	朝から何事も忘れたように快かった葉子の気持ちはこの電話一つのために妙にこじれてしまった。		或る女 (後編)
24	それを知ると葉子の全身は怒りのために爪(つめ)の先まで青白くなって、抑(おさ)えつけても抑えつけてもぶるぶると震え出した。		
25	倉地はさすがに不意をくってまじまじと寒さのために少し涙ぐんで見える大きな涼しい葉子の目を見やりながら、「どこからわいて出たんだ」といわんばかりの顔つきをした。		
26	葉子は気を落ち着けるために案内を求めずに入りに立ったまま、そつと垣根(かきね)から庭をのぞいて見ると、日あたりのいい縁側に定子がたった一人(ひとり)、葉子にはしごき帯を長く結んだ後ろ姿を見せて、一心不乱にせつせと少しばかりのこわれおもちゃをいじくり回していた。		
27		「それはあなたに不似合いな言葉だと僕は思いますよ。もし倉地という人のためにあなたが誤解を受けているのなら…	
28	倉地が先に行つて中の様子を見て来て、杉林(すぎばやし)のために少し日当たりはよくないが、当分の隠れ家(が)としては屈強(くつじょう)だといつたので、すぐさまそこに移る事に決めたのだった。		
29	雨風のために夜はにぎやかな往来もさすがに人通りが絶え絶(た)えだった。		

	地の文	会話文	作品名
30	。……葉子はここにも自分の暗い過去の経験のために責めさいなまれた。		
31	あらしのために電線に故障ができてと見えて、眠る時にはつけ放しにしておいた灯(ひ)がどこもどこも消えているらしかった。		
32	自分で板戸を繰りあげて見ると、縁先には、枯れた花壇の草や灌木(かんぼく)が風のために吹き乱された小庭があって、その先は、杉(すぎ)、松、その他の喬木(きょうぼく)の茂みを隔てて苔香園(たいこうえん)の手広い庭が見やられていた。		
33	そしてそのためには倉地にあらん限りの媚(こ)びと親切とをささげて、倉地から同じ程度の愛撫(あいぶ)をむさぼろうとした。		
34	こういう時の葉子はそのほどばしるような暖かい才(さい)のために世にすぐれておもしろ味の多い女になった。		
35	暗い所において明るいほうに振り向いた時などの愛子の卵形の顔形は美の神ビーナスをさえ妬(ねた)ます事ができたらう。顔の輪郭と、やや額(ぬか)ぎわを狭くするまでに厚(は)く生(は)えそった黒漆(くろしつ)の髪とは闇(やみ)の中に溶けこむようにぼかされて、前からのみ来る光線のために鼻筋は、ギリシャ人のそれに見るような、規則正しく細長い前面の平面をきわ立たせ、潤(うる)いきった大きな二つのひとみと、縮まって厚い上下の口びるとは、皮膚を切り破って現われ出た二対(ついで)の魂(たま)のようになまなましい感じで見ると人を打った。		
36	倉地の下宿のほうに遊びに行く時でも、その近所で人妻らしい人の往来するのを見かけると葉子の目は知らず知らず熟視(じくし)のためにかがやいた。		
37	二人(ふたり)は寒さのために頬(ほお)をまっ紅(か)にして、目を少し涙ぐましていた。		
38	それからというも葉子は忘我渾沌(ぼうがこんとん)の歓喜に浸るためには、すべてを犠牲(ぎせい)としても惜しまない心になっていた。		
39		これからも僕はこの矛盾のためにきっと苦しむに違いない」	
40		「僕が悪いためにせっかくの食卓をたいへん不愉快にしたようです。すみませんでした。僕はこれで失礼します」	
41	頬(ほお)の傷々(いたいた)しくけたために、葉子の顔にうべからざる暖かみを与える笑(えく)ほを失おうとしてはいたが、その代わりにそこには悩ましく物思(もの)わしい張り(はり)を加えていた。		
42	突然——それはほんとうに突然どこから飛び込んで来たのか知れない不快の念のために葉子の胸はかきむしられた。		
43	葉子の心はおどましくも苦々(にがにが)しい猜疑(さいぎ)のために苦しんだ。		
44	葉子は裏切られたと思う不満のためにもうそれ以上冷静を装ってはいられなかった。		
45	健康が衰えて行けば行くほどこの焦躁のために葉子の心は休まなかった。		
46	そのびりびりと神経の末梢(まっしょう)に答えて来る感覚のためにからだじゅうに一種の陶酔(たうすい)を感じるようにさえ思った。		
47	葉子の目にたまった涙のために倉地の姿は見る見るにじんだように輪郭(りんかく)がぼやけてしまった。		
48	そう思うと葉子はわが身でわが身を焼くような末練(まゝ)と嫉妬(しつと)のために前後も忘れてしまった。		
49	正井に秘密な金を融通するために倉地からのあてがいでだけではとても足りなかった。		
50	そして下宿屋(したしゆくや)に来(き)着(き)いた時には、息(いき)苦(くる)しさのために声も出ないくらいになっていた。		
51	そう気を回し出すと葉子は貞世(てんせい)の寝台(ねたい)のかたわらにいて、熱のために口(くち)びるがかさかさになって、半分目をあけたまま昏睡(こんすい)しているその小さな顔を見つめている時でも、思わずかっとなってそこを飛び出そうとするような衝動(しょうどう)に駆り立てられるのだった。		
52	そのひとみは熱のために燃えて、おどおどと何者かを見つめているようにも、何かを見いだそうとして尋ねあぐんでいるようにも見えた。		
53	その口(くち)びるの中から高熱のために一種の臭(くさ)いが呼吸(こそ)のたびごとに吐き出される、		
54	葉子はわれにもなく倉地(くらぢ)が傘(かさ)を持つために水平(すいへい)に曲げたその腕(うで)にすがり付いた。		
55	高熱のために貞世の意識(いし)はだんだん不明瞭(ふめいりょう)になって来ていた。		
56	苦痛(くるう)にしいたげられ、悪意(あくい)にゆがめられ、煩惱(ぼんのう)のために支離滅裂(しりめつれつ)になった亡者(もうじゃ)の顔……葉子は背筋(せきす)に一時に氷(こ)をあてられたようになって、身ぶるいしながら思わず鏡(かがみ)を手(て)から落(お)とした。		
57	我執(わしやく)のために緊張(きんじやう)きったその目は怪(あや)しく輝(かが)いた。		
58		……愛さんお前はそこにそうぼんやり立ってるためにここに呼ばれたと思っているの？	
59	その頭のまわりにあてがわるべき両手(りやうて)の指(ゆび)は思わず知らず熊手(くまで)のように折れ曲(ま)がって、はげしい力(ちから)のために細(こ)かく震(ふる)えた。		
60	うなだれた愛子は顔も上げず返事もしなかったから、どんな様子を顔に見せたかを知る由(よし)はなかったが、岡(おか)は羞恥(しゆうち)のために葉子を見かえる事もできないくらいになっていた。		

	地の文	会話文	作品名
61	車で揺られたために腹部は痛みを増して声をあげたいほどうずいていた。		
62	懸(か)け軸もない床の間の片すみにはきのう古藤が持って来た花が、暑さのために蒸(む)れたようにしぼみかけて、甘ったるい香を放ってうなだれていた。		
63	。しかし手術のために医員の一人が迎えに来たのだと思われた。		
64	葉子とはなんの関係もない広い世間から、一人の人が好意をこめて葉子を見舞うためにそこに天降(あまくだ)ったとも思われた。		
65	眩暈(めまい)がするほど一度に押し寄せて来た憤怒と嫉妬(しつと)とのために、葉子は危うくその場にあり合わせたものにかみつこうとしたが、からくそれをささえると、もう熱い涙が目をごがすように痛めて流れ出した。		
66		呪(のろ)いのためにやせ細ってお婆(ばあ)さんのようになってしまったこのからだを頭から足の爪先(つまさき)まで御覧に入れますから……今さらおあきれになる余地もありますまいけれど	
67	電灯が故障のために来(こ)ないので、室内には二本の蠟燭(ろうそく)が風にあおられながら、薄暗くもっていた。		